

耳

を澄ませていたら、エンジン音が聞こえ、それが徐々に大きくなってきた。同時に、対岸から、

「来た。赤と青！」

と甲高い声が響く。声の主は、アシスタントを買って出てくれた対岸の小学三年生の女兒である。お囃子を聞きつけて川岸に出てきたので、稽古がてらF子が小咄をいくつか聞かせたら、おもしろがって互いのことをあれこれ話すようになった。川を挟んでの日常会話は経験がないので、F子もぼくも高揚感があった。江戸時代もこんなふうにしやべっていたのだろうか。いくら川の向こうとこちらで身分が異なっても、むしろその分だけ、会話を求める気持ちは強かっただろう。道を挟むよりも垣根が低い気がするの、水の効能かもしれない。

その子の報告の通り、赤と青が視認できたところでお囃子を流す。スピードが緩んだのを見計らって、F子は声高らかに小咄を語った。稽古を積んだ甲斐あって、申し分ない出来であったが、船の周囲の様子が何やらおかしい。まるで船頭とデッキで見守る私たちの戸惑いが川面をすべる船の周りに渦巻いているかのよう。違和の正体はすぐにわかった。乗客は、たった一人。しかも外国人だったのである。後に、

「落語やつてるから聞いてくれ、と説明しようとしたんですが、いかせん私の英語力ではどうしようもないくて」

と、船頭は釈明したのだが、仮に彼が英語が堪能であったとしても、小咄の中身はおろか、なぜ民族衣装をまとった女の子が大声でしゃべっていたのか、船客にはさっぱり理解できなかったにちがいない。幾分身体をこわばらせて過ぎてゆくアメリカ人（これも後に聞いた）を私たちはあつけにとられて見送ったのだ。

保護者も私も「最高のネタができた」「こんなおもしろい結末が待っていたなんて」と口々にはやし立てては笑ったものだから、F子も笑いながら、「シヨックでした」と言った。

二日後さらに一週間後と、後輩船頭と示し合わせてのそれとゲリラ落語とを重ねた。船の速度や船内の状況は、一艘一艘みなちがう。こちらが意図したとおりにはず、いかない。それでも、そのジタバタをF子が楽しんでいるのと、うまくはまったときの船客や船頭の破顔一笑に救われる。

船上の人たちは、その多くが松江を味わいに来た一度限りの観光客。突然降りかかってきた小咄を堀川ものがたりの葉として心に留めてくれたらうれしい。

2024.6.10

1448号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)



F690-0823島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

北海道への旅、三度目
木幡智恵美

9

前の車の方が連絡をしていた車屋さんは、側道横にあるコンビニの駐車場で待機していた。その車屋さんが「警察の許可が出たので車を運びます」と知らせに来て、奥さんを助手席に乗せ、警察の方の誘導で側道へ降りていった。その十分くらい後に、追突した方の乗用車もレッカー車に乗せられ、若い男性と共に行ってしまった。残ったのは、うちの車だけ。夫は、保険会社やら車屋さんとのやり取りをした結果、「今日は車屋さんが開いている時間に帰れそうにないし、荷物もたくさん積んでいるから、JAFに頼んで車をうちまで運んでもらうようにした」と言う。それから夫は娘に電話をかけた。何もかも片付いてからにしようと言っていたのに、もうかけている。娘にしたのならと、私の方は二男にメールを入れた。すぐに、「え!!!マジ!怪我は?」の返信があり、今度は携帯電話をかけて状況を報告した。

警察の方から、病院で診察を受け、怪我があれば人身事故になり、ぶつけた方は再度警察に来てもらうことになるので、その際は連絡を入れるようにと名刺を手渡された。

そして、長く閉鎖していた高速道路の流れを元に戻すため、うちの車の後輪二つにジャッキをつけ、島根方面から側道に入る手前の空スペースに運ばれた。一人がハンドルを握り、二人が車を押して。その後を付いて私たちも移動する。陽は少し傾いたとはいえず、汗が滴り落ちる。配電盤らしきものの陰に入った。目の前の道路を車が流れ出し、ほつとす

る。「私たちはこれで引き揚げます。何かあったらあそこにいる二人に行ってください」と、少し前に現場に来られた制服ではない二人の男性を指さし、パトカーはその場を去った。高速道路のメンテナンスをしている長男が、帰省した際によく下請けの方たちの話をする。二人の男性も高速道路関係での何らかの役を引き受けているのだろう。

しばらくして、JAFの車が逆車線を走るのが見えた。軽く会釈されたので迎えるの車に違いない。一番近い側道で降りて、こちら側の車線を走って来るのだ。十五分くらい待つとその車がやって来た。うちの車をJAFの荷台に乗せるまで、二人の男性が車を止めていてくれた。これでようやく帰れる。時刻は五時半。事故が起きて三時間以上経過していた。

30代フリーター 朝日新聞の世論調査（5月18、19日）によると、自民党を中心とした政権が続くのがよいか、自民党以外の政党による政権に代わるのがよいかとの質問に対し、「自民党中心」33%、「自民党以外」54%と、半分以上が政権交代を望んでいる。なのに、自民党に対抗する勢力として野党に「期待できる」は19%に過ぎず、「期待できない」が73%を占めている。

年金生活者 調査結果から推定できることのひとつは、自民党が下野によって「まとも」になることを国民は期待しているということだ。これまでも国民はそれを期待して自民党に大小のお灸を据えてきた。今回はいちばんきつい下野というお灸を据えようとしていると言っていることができる。同様のお灸は1993年、2009年の政権交代で経験済みなので、55年体制時代と違い、野党による政権を国民はそれほど不安視していない。

30代 政権交代もお灸だとすれば、自民党が政権を失つても「自民党中心」の政治は続くということだ。今回の調査の政党支持率を見ると、自民24%に対し、野党第1党の立憲は6%と4分の1に過ぎない。これに維新、共産の支持率を足してもなお自民におよばない。裏金事件で戦後最大といつていいほどの国民の不信を買っているにもかかわらず、これだけの支持率があるのは、自民党と野党が、「政党」という同じ言葉でくくられながら、中身は性質の大きく異なる、非対称な存在であることを示唆している。

それを使い換えれば、現在の日本の政治は、自民党あるいは自民党的なものを抜きには成り立たないということでもある。自民党が初めて下野して成立した細川連立政権は、自民党の中心人物だった小沢一郎が党を割ってつくった新党（新生党）が支えた。2009年の自民党から民主党への政権交代もその小沢が立役者となった。30代 自民党という政党のその「根の深さ」は何に由来しているんだ。

村の縮小とともに、天皇がその存在感をわずかずつであれ薄めてきたように、自民党もまたその地位を相対的に低下させてきた。年金 たしかに天皇制も自民党もその基盤を農村に置いていたので、農村の縮小は「交換」が困難になることを意味する。それでも天皇制が「交換」を維持できているのは、それが宮中での農耕祭儀によって象徴化され、現実から切り離されたものになっているからだ。現実の農村が縮小あるいは消滅しても、その影響をゆるめることができる。おそらく自民党も「交換」の象徴化によって、その命脈を保っているとは推定される。各種の農業保護政策は、実質的な効果だけでなく、象徴的な効果を発揮している。農業人口が減り、保護の対象は全産業の従事者のうちごくわずかなのに、国民全体がこの政策の恩恵をじかに受けているかのような意識を多くの国民が持っている。

他方で、グローバリゼーションの進行とともに、農村と工場の混合体、言

の政治は続くということだ。

年金 今回の調査の政党支持率を見ると、自民24%に対し、野党第1党の立憲は6%と4分の1に過ぎない。これに維新、共産の支持率を足してもなお自民におよばない。裏金事件で戦後最大といつていいほどの国民の不信を買っているにもかかわらず、これだけの支持率があるのは、自民党と野党が、「政党」という同じ言葉でくくられながら、中身は性質の大きく異なる、非対称な存在であることを示唆している。

それを使い換えれば、現在の日本の政治は、自民党あるいは自民党的なものを抜きには成り立たないということでもある。自民党が初めて下野して成立した細川連立政権は、自民党の中心人物だった小沢一郎が党を割ってつくった新党（新生党）が支えた。2009年の自民党から民主党への政権交代もその小沢が立役者となった。30代 自民党という政党のその「根の深さ」は何に由来しているんだ。

い換えれば村落共同体の代替物としての企業は、年功序列・終身雇用の解体を通して消滅しつつある。しかし、それでもなお正社員信仰は根強く、農村

年金 天皇制の「根の深さ」と重ね合わせて考えたくなる。吉本隆明は、大和王権が統一国家をつくることができたのは、自分たちの神を既存の群立国家に押し替える代わりに、自らはその群立国家の神を拝むという「交換」を通してだったと指摘した（「敗北の構造」）。

自民党もまた日本国民と「交換」をした。戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、自民党は国民の多数が従事していた第1次産業を保護する代わりに、国民には第2次産業の支え手になることを求めた。自らは農村の神を拝み、国民には工場の神を拝むことを求めた。その結果、「めいめいが混合してしまおうということ」（「敗北の構造」）が起き、農村と工場の混合体が出現した。国民は自らの所属する企業に自らのルーツである村落共同体を見出し、高度経済成長を支えた。

30代 「交換」が成功したのは高度経済成長があったからでもあるだろう。だが、その時代はとうに過ぎた。それほどばかりか、高度経済成長にともなう農

としての企業が象徴として残存していることを物語っている。自民党が長年続けてきた「交換」は現実的には細々としたものになりながら、それゆえにかえって象徴性を強め、この党を支えているということが出来る。

30代 自民党、天皇とくれば、アメリカに触れないわけにはいかない。この3者で今の日本の骨格をおおざっぱに素描できる。

年金 アメリカが日本国民と交換したのは、自らが昔から信仰する戦争の神と、戦後の日本人が信仰する平和の神だ。その結果、生まれたのが「戦力なき軍隊」と呼ばれる戦争と平和の混合体、自衛隊にはかならない。

だが、覇権の後退を余儀なくされているアメリカは平和の神を拝む余裕を失いつつある。このままでは自らの支配力の源泉である「交換」が破綻する。それをつくろう論理が平和のための戦争準備だ。交換の実質を骨抜きにする象徴化がここにも見られ、それはアメリカの日本支配を延命させるだろう。

ニュース日記 925 中村 礼治

それでも自民党の支持率が どこよりも高い理由